

令和3年度第1回総合教育会議 次第

日時：令和3年8月10日(火)

午後4時～

場所：東庁舎2階大会議室

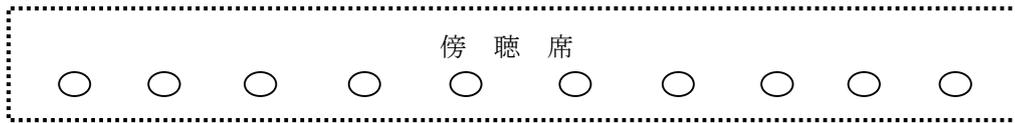
1 議 題

- (1) スクールソーシャルワーカー配置拡充による支援体制の充実について 資料1

2 報 告

- (1) 30人学級の実施検討について 資料2

令和3年度第1回総合教育会議 配席図

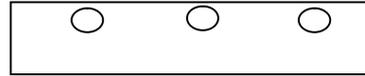


出入口

事務局



事務局



教育相談

センター所長 学校指導課長 教育政策課長



企画課長

財政課長



報道陣

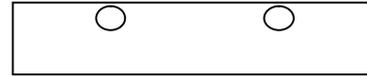
教育監

教育部長



総合政策部長

財務部長



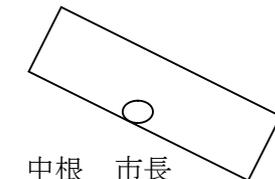
小出 委員



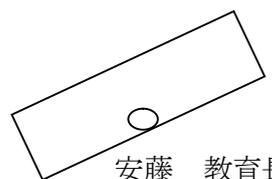
福應 委員



上原 委員



岡田 委員



中根 市長

安藤 教育長

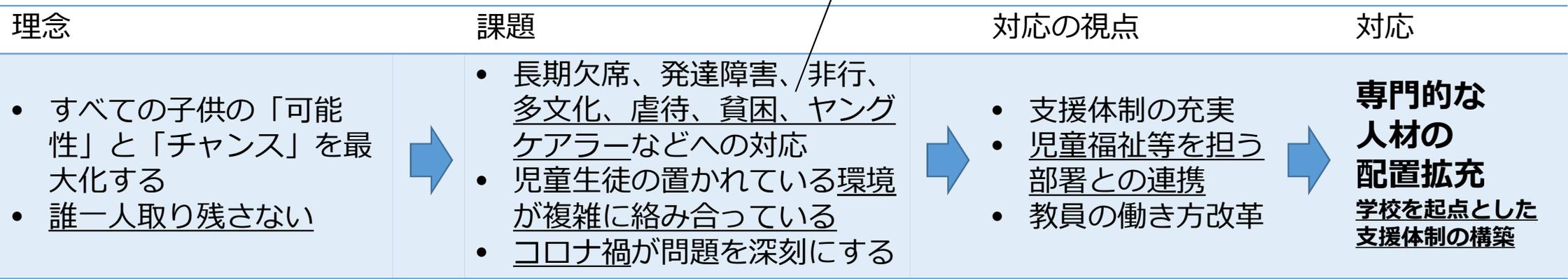
出入口

スクールソーシャルワーカー配置拡充による支援体制の充実

資料1-1

必要性

社会文化部、こども部、福祉部等に関わる課題がある。学校だけでは把握しきれないこともある。



令和2年度の成果と課題 (社会福祉士3人 ショート→ロング)

事後対応から未然防止の体制へ

期待できる効果

成果：学校への具体的支援の強化・充実

- ① アセスメント
 - ② ケース会議
 - ③ プランニング
- きめ細かな対応の充実

(これまで) 前兆 → 問題発生 → 学校の対応 → 対応の困難化 → 申請 → SSW対応 (アセスメント等)
 (これから) 前兆 → SSWアセスメント → ケース会議 → SSWプランニング → 観察や対応

- <学校の視点>
 - ・ 子供の授業への集中
 - ・ 教員の授業への集中
- <家庭の視点>
 - ・ 虐待防止
 - ・ ヤングケアラー対応

課題：より効果的な活用になるよう配置拡充や配置形態の工夫が必要。

- ・ 派遣型から拠点型へ
- ・ 中学校区に1人配置

7人体制 → → → 20人体制へ
 ロング3人 常勤&ロング16人
 ショート4人 ショート4人

**学力向上
 子供の権利の保障**

オール岡崎で学校を起点とした支援体制の構築を目指す

スクールソーシャルワーカー（SSW）の現状と今後のイメージ

資料1-2

対応範囲の変化

【第3段階】

特別なニーズのある特定の子供
長期欠席、発達障害、非行、多文化、虐待、貧困、ヤングケアラーなど

これまで（R元年度まで）

（全員）ショートパート
派遣型（*常勤換算2.2人）

【第3段階】になって初めてSSWの活動が始まることが多いが、令和2年度、SSWの一部がロングパートとなり、少数の【第2段階】の子供たちへの支援機会が増えつつある。

【第2段階】

苦戦している一部の子供
登校しぶり、学習意欲の低下など

現状（R2,3年度）

（一部）ロングパート
派遣型（*常勤換算：3.9人）

これから（R7年度までに）

【第1段階】

すべての子供
入学時の適応、学習スキル、対人関係スキルなど

虐待、貧困、
ヤングケアラー
教師だけでは把握が
難しいケースがある

（多数）ロングパート&常勤
拠点型（*常勤換算：15.8人）

*【常勤換算】週38.75時間を基準として、1人が1か月働くと「1人」とする。

教師の気づきからSSWへ相談 → SSWも気づく体制へ（未然防止の強化）

教師の支援から専門機関による支援 → SSWからつなぐ体制へ（支援の強化） オール岡崎で学校を起点とした支援体制の構築

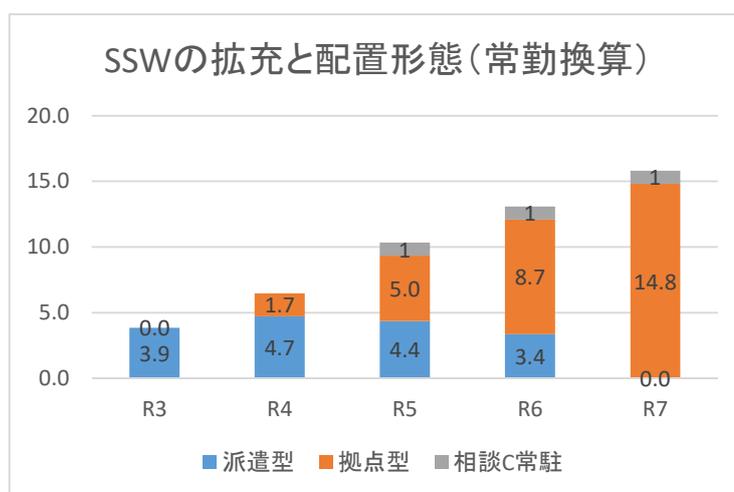
オール岡崎の支援体制構築に向けた SSW 配置目標

- 令和 7 年度までに**常勤 5 人、ロング 11 人、ショート 4 人、計 20 人を配置**（文部科学省は全中学校区への配置を目標としている）する。
- 原則 1 中学校区に対し 1 人配置（常磐中、河合中学区は、2 中学校区で 1 人配置想定）する。
- **オール岡崎の支援体制構築**の観点から、一定数正規職員としての SSW を配置する。
- 正規職員のうち 1 人を、SSW 集団を統括する係長とし、教育相談センターに配置する。
- 正規職員の配置に伴って、令和 4 年度以降は、報償費対応（月 1 回 6 時間）のアドバイザーは置かない。
- ショート（教員 OB）の助言は、社会福祉士が学校に入っていく上では必要なので、現状を維持する。
- 配置形態については、派遣型から拠点型への変更を円滑に移行できるようにするため、1 年間はモデル的に実施して、その後 2 年間は派遣型と拠点型の併用をして、令和 7 年度から拠点型完全実施とする。

配置スケジュール（人） ※（資格）→ 社会福祉士

	R3	R4	R5	R6	R7
正規職員（資格）係長			1	1	1
正規職員（資格）		0	2	3	4
ロング（資格）	3	6	7	9	11
ショート（教員 OB）	4	4	4	4	4
合計人数	7	10	14	17	20
常勤換算人数	3.9	6.6	10.3	13.1	15.8
アドバイザー	1	1	0	0	0
配置形態	派遣型	拠点型一部 モデル実施	派遣型と拠点型併用		拠点型
備考	←← 岡崎市学校教育等推進計画期間 →→				

- 予算：オール岡崎の支援体制構築の観点から人事課予算が適切と考える。（学校指導課予算から人事課予算への組み替えは今後協議）
- 所属：学校指導課とする。
- 配置：教育相談センター（1 人）、拠点中学校（19 人）とする。
- 業務：係長 SSW は、市内案件の把握・助言等、研修企画運営、市教委と連絡調整等。拠点配置 SSW は、担当中学校区の小中学校の児童生徒への対応等
- 情報共有：毎週月曜日の午前中は、教育相談センターで集まってケースを共有する。
- 研修：月 1 回の SSW 班会議において行う。



第 1 回 岡崎市 30 人学級実施検討会議 (令和 2 年 1 2 月 2 5 日 (金) 15:00~)

<委員から出された意見のまとめ>

【30 人学級実施の意義について】

- ・ 30 人学級の実現で、これまでとは違った学び方が行われるようになると面白い。
- ・ 基本的には少人数学級の方が成績も上がり、メンタルにも良いのは明らかである。
- ・ 一人一人の子供たちをより良く育てるために、30 人学級にするのは非常に意義の高いことであり、価値のある教育ができる。
- ・ 子供たちが授業中に話をする時間が増える。
- ・ (少人数学級により) 認知的な能力だけでなく、非認知的な能力についての育成についても効果があると感じる。
- ・ 子供たちと (教師が) 接する時間が増える。(少人数学級を実現している学校では) 主体的な学びに、どんどん取り組んでいる。
- ・ 不登校児童生徒への支援や、学力の保障といった問題を解決していくために、有効な手立ての一つが少人数学級であると、経験上実感できる。
- ・ 教員の仕事が減らせない中で、働き方改革を進めることができる。
- ・ 子供が、学習をよりよく理解できる。教員の負担も減る。
- ・ クラスの人数が少なくなることで、(障がいのある子供を支援する視点からも) 子供たちが良い学びや育ちをしていけるのではないかな。
- ・ 少ない人数だと子供たちが互いに気にしながら、助け合って関与性をもって活動していくことができる。



30 人学級実施の意義について

- ① 一人一人の興味・関心や学習進度に応じた、個別最適化された学びの実現
- ② 対話活動の充実による、受動的な授業・学習から積極的・能動的な授業・学習への転換
- ③ 教師が落ち着いて、一人一人の子供と接することのできる時間の確保

全ての子供たちの可能性を引き出し、誰一人取り残さない岡崎の教育の実現

【30人学級の課題について】

- ・授業の組み合わせによってフレキシブルに（教室を）使い分けられないか。3クラスで実施するのが適切な科目と4クラスや少人数に適切な科目があるとすれば、それらを組み合わせると面白い。
- ・大学の低学年からインターンシップを行って、こうした会議にも参加させて岡崎の教育の魅力を伝えていく必要がある。
- ・人材の確保や育成について、教員になりたい人などが、高校生や大学生のうちからキャリアアップできるような仕組みも必要。
- ・担任が増えるので、ある程度質の高い教員が揃わなければ、かえって（子供たちにとって）マイナスになる恐れがある。
- ・全ての条件（予算、教室、人材等）がそろってからスタートでは、現場としては時間がかかりすぎる。
- ・40人学級のほうが、友達が増えるという子供の声もある。
- ・（幼稚園では）遊ぶときは大人数にするなどしている。30人にこだわらず、その時の柔軟性を考えていくとよい。
- ・人材の確保については、教育現場が非常に魅力的な場であると世間に伝えることが大切。
- ・教員という枠でなく、もっと他のところから人材を取ってきていいと思うし、教員免許がなくても子供がすきならいいのではと思う。
- ・岡崎市の教育ビジョンが、子供たち一人一人をどう育てていこうとしているかが重要。それが岡崎で働く先生方の魅力やモチベーションともなり、岡崎で働きたいと考える教員の増加にもつながる。



30人学級実施の課題について

① 教員に関する課題

- ・確保方策 … 任用形態、インターンシップ、本市の教育の魅力の発信
- ・研修方策 … 研修制度設計
- ・管理方策 … 採用等人事管理、俸給・処分等の制度設計

② 学校施設等に関する課題

- ・教室 … 既存教室の有効活用方法の検討、活用できる教室がない場合の対応
- ・学校備品等 … 黒板、エアコン、大型ディスプレイ等教室備品の整備

③ 実施に関する課題

- ・実施形態 … 実施学年、各学年における1学級の適正人数
- ・実施時期 … 短期・中期・長期での実施目標の策定

第 2 回 岡崎市 30 人学級実施検討会議 (R3.3.19 実施) 要点整理

【議題 1】岡崎の目指す教育について**(主な意見)**

- ユニークな取組みが多く、非常に驚いた。
- 新学習指導要領に示される「主体的・対話的な学び」にむけて、額田中学校の報告は大変参考になった。
- 小集団の学習を導入する際、先生方の負担感があったのではないか。
- 岡崎版 GIGA スクール構想を進めていく上で、教員の力量 (ICT を授業で利用する力) の向上が必要となるのではないか。
- タブレットを利用して、様々な人とやり取りをしながら学ぶことができる。ICT は対話的な学習を促す意味でも効果がある。

(まとめ)**・額田中の報告**

4 人組の小集団を核にした授業により、生徒の学びが主体的になった。
⇒ 学級の人数を 4 の倍数で考えることも一つの案。

教師が主導する授業 → 学びが受け身になる

子供同士の小集団を核にした授業 → 主体的に学び授業が分かりやすくなる

教師が出すぎるのではなく、見守り、行き詰ったときに子供の手助けをする。
＜教師の役割の変化＞ティーチャー (教える者) からファシリテータ (促進者) へ

・岡崎版 GIGA スクール構想

ICT に対して、教師も子供も自主的に操作を学ぶことができる環境を意識
個人的な学習ツールとしての ICT だけでなく、対話ツールとしての ICT の活用

↓

日本型の教育スタイルに、ICT を加えることで主体的・対話的な学びを実現

＜岡崎の教育の特色＞

キーワードは、「自立」「共生」「創造」である。

すべての子どもの可能性を伸ばすことができるよう、個の実態を把握し、子ども
の特性を尊重した教育を推進する。また、先進的な教育環境により、子どもた
ちの多様な学びに対応する。

【議題2】 30人学級の教育的効果について

(まとめ)

- ・ 1学級当たりの人数が少なくなれば、教師が子供をより把握しやすくなる。
- ・ 教室内での一人当たりのスペースが広くなれば、子供たちはより落ち着いてグループ学習などの対話活動に取り組めるようになる。
- ・ 岡崎市の教育が目指す対話中心の授業を行っていく上で、30人学級を実現していくことは、より効果的である。

【議題3】 30人学級実施の課題について

(主な意見)

- (1学級) 30人と他の人数で効果的に差がないのであれば、ある程度30人にこだわらなくてもよいのではないか。
- 15人くらいの学級では合唱や体育の授業で限界を感じるがあった。
- 30人は充分大人数。少子化による少人数と、(教育の質の向上を求めて行う) 本委員会の議論は分けて考えるべきだ。
- 人材確保のために、先生という仕事が魅力的だということを発信するような具体的な方策を取るべきではないか。
- 教員の確保については給料を上げるだけでなく、免許を失効している人に注目するのもよいのではないか。

(プロジェクトチームへの依頼・質問)

- 本市の調査に対し、「30人学級を実施した場合に費用対効果が得られないのではないか」と回答した自治体に、そのように回答した理由を追加調査して欲しい。

<追加調査による回答結果>

- ・ 教員の人材確保が難しい状況にあることから、雇用したとしても教員の質や子供たちへの指導力に影響が出ないか心配である。(A市)
- ・ 互いに切磋琢磨する中で、学びを深め、望ましい人間関係を育むためには、学級の人数が少なすぎても問題があるため、適切な学級の人数を研究していくことが必要。(B市)

(まとめ)

- ・ 少人数学級の効果をあげるには、質の高い教員の継続的な採用が必要となる。
- ・ 1学級の適正人数について、今後も検討していく必要がある。

第 3 回 岡崎市 30 人学級実施検討会議 (R3. 5. 20 実施) 要点整理

【議題 1】 30 人学級のシミュレーションについて**(まとめ 岡崎市小学校の学級状況とシミュレーション)**

- 岡崎市 1 クラス平均 27.5 人だが、現実には 30 人超えのクラスが多い。
- 令和 7 年度に児童・生徒数が最も多くなる。
- 令和 4~7 年度に約 40 学級増、令和 7~9 年度に約 20 学級減。
令和 9 年度から 4, 5 年すれば現在の学級数に戻ることも考えられる。

(主な意見)

- ハード面での柔軟性や可能性を考えながら、学校が運用しやすいような計画を。
例) 増築工事の場合、安定的に児童生徒数の増加が見込まれるエリアから遂行する。
- 少人数学級の利点である対話的な学びや対面式の授業が進めやすい環境を整えるべき。
- 教室や人材確保等の問題を踏まえた上で、30 人という数字にこだわり過ぎず、現実的に可能などころから進めていく方向で検討してほしい。
- (30 人学級実施の場合) 令和 8 年に 52 人の教員が必要。大学の誘致や高校生からのキャリアアップ等、人材不足解消のシステムが必要。
- 35 人学級と 30 人学級で、教室の状況にどのような違いがあるのかを明らかにすると考えやすいのでは。多くのシミュレーションで比較できると分かりやすい。
- 少人数に適した教科と大勢で活動することが効果的な教科もあるため、運用の方法を考えるべきとの意見。35 人学級の実施状況を見てから 30 人学級について協議しても良いのでは、という意見も。(私立幼稚園・園長アンケートより)

【議題 2】 小学校教室の現状と対応について**(まとめ 小学校教室の確保方策)**

- 少人数・学習教室・多目的・生活・会議室・その他教室を普通教室へ転用。
- PC 教室を改修し、普通教室へ転用。
- 適応教室は普通教室サイズ、通級・日本語・相談は普通教室の半分の大きさにする。
- 特別支援教室は、教室の大きさを半分にしてクラス数を増やす。
- 転用と改修をしても、11 の小学校で計 33 教室が不足。

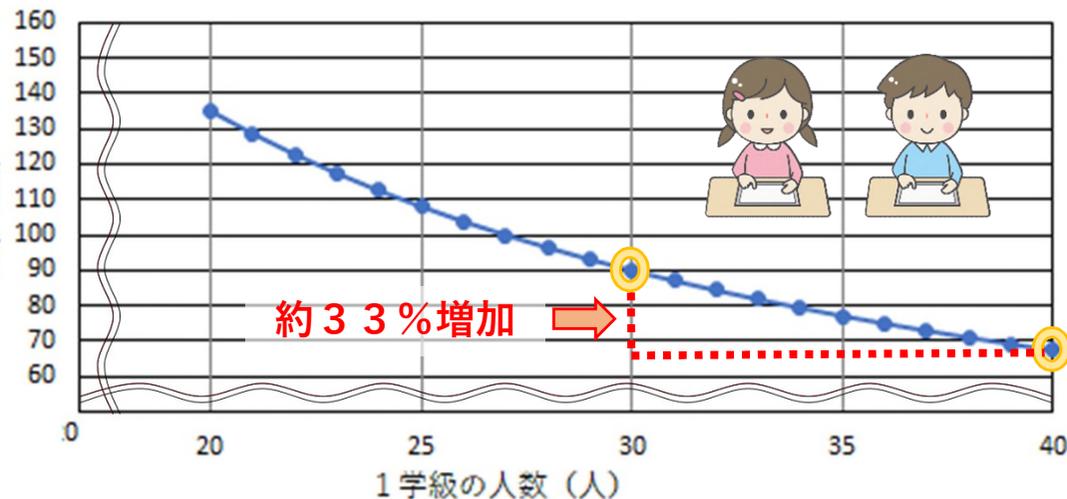
(主な意見)

- 特別教室を転用した場合、機能をどこに補完するか考えるべき。
- PC 教室を普通教室に転用した場合、パソコン部の居場所が懸念される。
 - ➡機能の補完や部活動については、今後の検討課題。
- 特別教室の転用で、1 クラスだけ離れる教室が出るのが懸念される。
 - ➡特別教室と通常教室が別にある学校は転用が難しい。学校ごとに教室等の配置を把握し、整理する必要がある。
- 児童生徒数のピークが過ぎた後、転用した特別教室を元に戻す前提で転用するのか。
 - ➡現在、特別教室の一時的な転用については検討していないが、各学校の課題となる。
- 学区を飛び越えて分散することで、人件費や教室の問題がクリアできるのでは。
 - ➡小さい学校だと PTA 役員など保護者が務めることが多くなる。周りの生徒と同じ学校に行こうとする等、コミュニティの観点から難しいケースも。
- 長期欠席者の学習環境を整える機会となるのでは。
 - ➡オンライン授業、ドリル学習ソフトを組み込んで、自宅の生徒に配信する。
そのような学習を出席として認める等の方策を考えていきたい。
- 多目的教室のような、学年やクラスに関係なく活動できるスペースが必要では。

1 時間の授業で教師が個々の子どもにかかわることができる時間

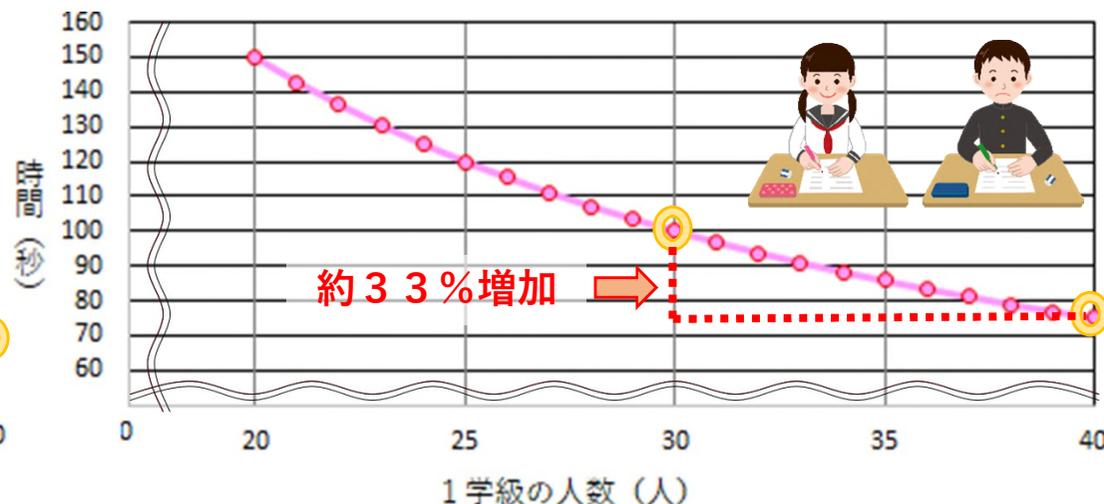
【小学校】

1 時間の授業で教師が児童一人にかかわることができる時間



【中学校】

1 時間の授業で教師が生徒一人にかかわることができる時間

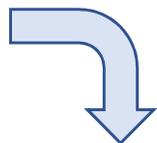


小学校では、
 40 人学級の場合 67.5 秒 35 人学級の場合 77.1 秒
 30 人学級の場合 90 秒 25 人学級の場合 108 秒

中学校では、
 40 人学級の場合 75 秒 35 人学級の場合 85.7 秒
 30 人学級の場合 100 秒 25 人学級の場合 120 秒

1 学級の児童生徒が 40 人 ⇒ 30 人となることで、
 教師一人が子どもと関わることのできる時間は、**約 33% 増加**します。

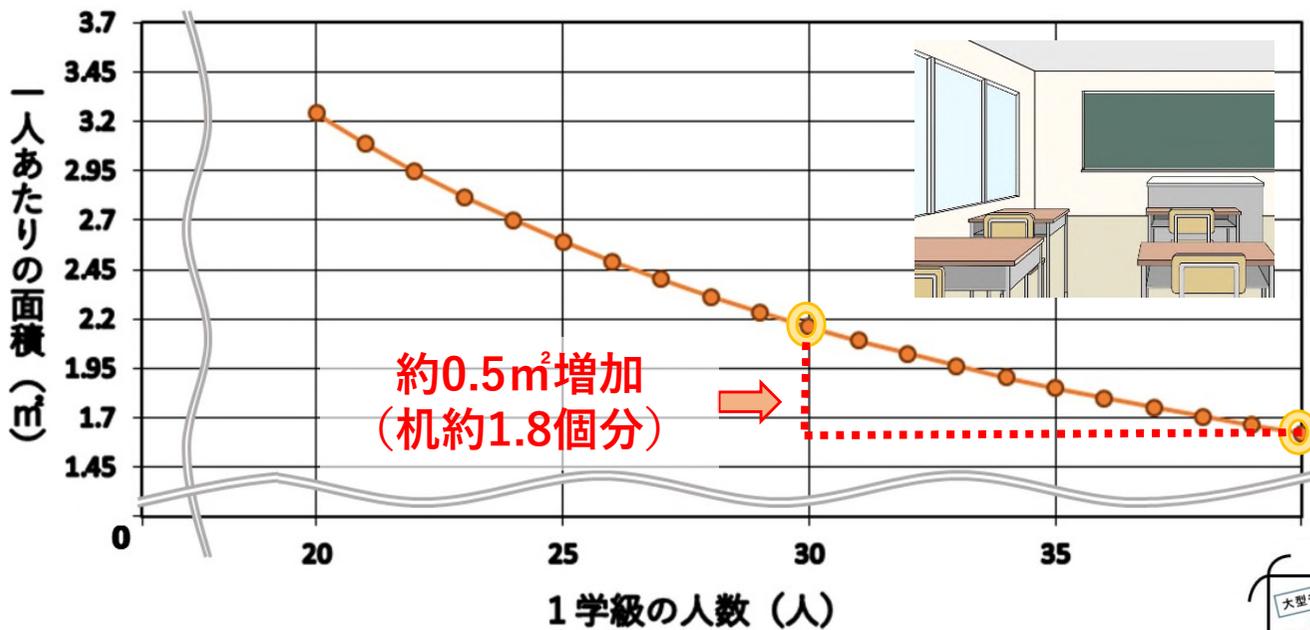
増加した時間で教師は・・・
 つまずきの見られる子どもを個別支援
 課題が達成できる子どもに新たな課題の提示



誰一人取り残さないためのきめ細やかな指導

【少人数学級による効果の例 ②】

教室における一人あたりの面積

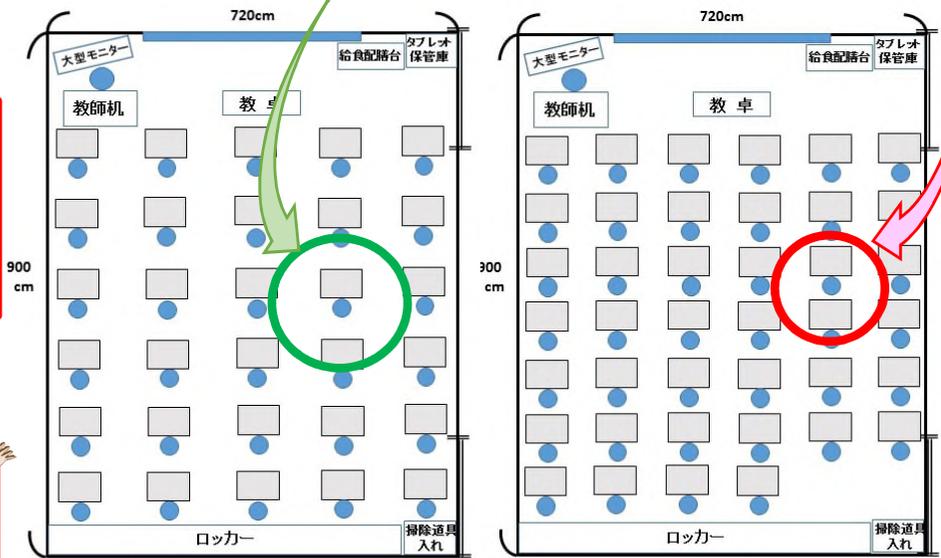
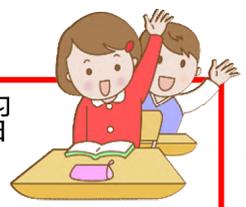


1学級の人数	一人あたりの面積
40人	1.62 m ²
35人	1.85 m ²
30人	2.16 m ²

1学級の児童生徒が40人 ⇒ 30人となることで、一人あたりの面積が、約**机1.8個分**増加します。

教室を広く使うことで・・・

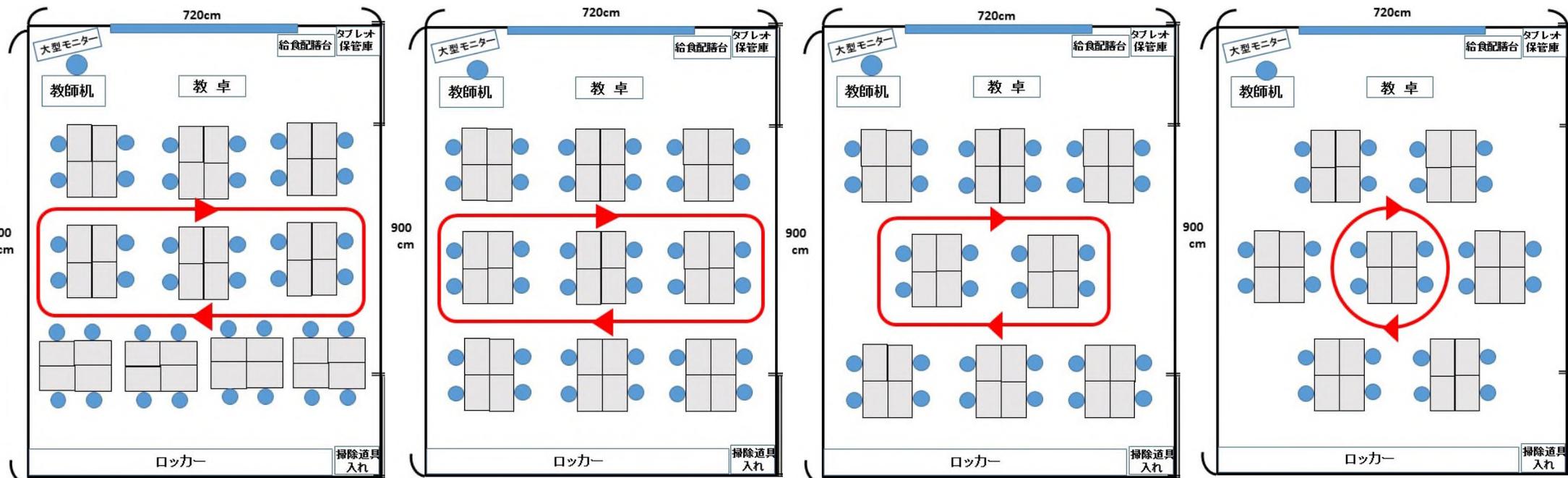
- ・ 子供たちは、よりのびのびと自分の学習に取り組めるようになる。
- ・ 新型コロナウイルスやインフルエンザなど感染症の感染リスクを低減することができる。



【30人学級】 【40人学級】
 【30人、40人学級の教室イメージ】

※1 教室は、一般的な広さ（720cm×900cm）で試算
 ※2 机の大きさは、新JIS規格（65cm×45cm）試算

4人でグループ学習を行う際の教室レイアウト (例)



【40人(10グループ)の場合】

【36人(9グループ)の場合】

【32人(8グループ)の場合】

【28人(7グループ)の場合】

※ 図中の赤線は、子供を机間指導する教師の動線

40人 (10グループ)では

⇒ グループとグループの間隔が狭く、教師が支援のため各グループを回りづらい。

36人 (9グループ)では

⇒ 隣のグループと横並びになるので、話し合いなどで他グループが気になりやすい。

32人 (8グループ)では ・ **28人 (7グループ)**では

⇒ 他グループとの間隔がしっかりあり、教師も各グループを見て回りやすい。



1学級の人数を減らしていくことで・・・

より教師の目が行き届いた状況で、子供たちの対話活動を支援できる